

総評

評論、小説、古文、漢文について、苦手な分野を作らず、バランスよく国語の力を伸ばしていきたい。高一の現時点では、古文、漢文の学習状況によって、点数の差がつきやすく、今回の模試でもその傾向が見られた。古典で思うように得点できなかった人は、まず、単語の意味や文法事項、句形の知識などの基礎をしっかりと身につけよう。基礎固めがこの先の伸びにつながるので、今回間違えたところはきちんと復習しておくことが大切だ。

問題別講評・採点基準

一 評論

- (一) 熟語は、一字でも誤りを含んでいたら不可。(b)「ちようこく」を「ちようかつ」と読む誤りや、(d)「糧」で誤りが目立った。
- (二) 誤答はさまざまであった。空欄の次の段落にある「キュレーターの仕事は……配置する人として始まった」に注目できたかがポイント。

二 採点基準

※a 人は生まれ育った文化や情報環境の蓄積と、直観や感性を総合して対象の意味をとらえるため、b 異文化の地では作品は理解されないか、誤解される可能性があるからと説明して
—— 16点

* a・b 部各8点。
b について、〈欧米の神話を共有していない地域では、物語が機能しないから〉という方向の答案が多かった。〈物語が機能しない〉からこそ生じる問題についても言及してほしかった。

三 採点基準

※a 印象派絵画は、風景や人物、人びとの生活などをテーマに b 光の印象を

色のタッチに置き換えて描いているため、c 文化を共有していなくても理解できるからと説明して
—— 14点

* a 部5点、b 部4点、c 部5点。

〈印象派絵画は、作品の解釈におけるずれが少ないから〉という方向の解答が散見された。ここでは、〈なぜずれが少ないのか〉まで踏み込んで解答してほしかった。その内容こそ、印象派絵画が世界中で愛好される理由といえるのである。

(五) 誤答は(A)や(E)が目立った。該当箇所に戻り、前後の文脈や、場合によっては問題文全体の趣旨を丁寧に読み取って、選択肢を吟味してほしい。

(六) 問題文全体を対象とする内容合致問題である。誤答は(E)が多かったが、キュレーターは鑑賞者に「予備知識」を与える存在ではない。

三 小説

(一) 全体的によくできていたが、(c)で誤答が散見された。語句の意味をイメージや先入観で曖昧に覚えていると、選択肢を選ぶ際に迷うことになる。辞書などを活用して、語義をしっかりと確認しよう。

二 採点基準

※a 水の戯れは、二年前に作られたパヴァーヌよりも b 格段に難易度が高く、c ラヴェルの作曲家としての成長が感じられるということとと説明して—— 12点

* a・b・c 部各4点。

〈パヴァーヌと水の戯れは同じラヴェルによって作られた曲にもかかわらず、難しさやよさが格段に水の戯れの方が上、ということ〉といった方向の解答が散見された。37行目「ラヴェルは水の戯れで急に成長した」に着目して、水の戯れではcの〈作曲家としてのラヴェルの成長を感じたこと〉まで含めて説明してほしい。

(三)〔採点基準〕

※ a 自分はピアノが上手くないことを認め、b 自分の実力を離れて作曲しようと割り切ることによって、c 作曲家として飛躍したこと」と説明して——12点
* a 部4点・b 部5点・c 部3点。

〈ラヴェルは自由な作曲をした〉といった言及にとどまり、〈作曲家として飛躍した〉まで踏み込めていない解答が目立った。傍線部周辺にまで目を配って、70行目の「そう考えなければ納得できないほどのラヴェルの飛躍」という記述にも着目することが大切。

(四) 誤答は(ア)や(エ)が目立った。とくに、(エ)の「さわにも新たな道を提示できるだろうと確信した」といったものもらしい内容については、一見すると選びたくなるが、こういった選択肢こそ、文中の記述と慎重に照らし合わせる必要がある。

(五) (4)はよくできていたが、(5)で(エ)の誤答が散見された。「特別な音楽の才能をもつことに対しては」と限定されているので誤り、ということに気づいてほしかった。

(六) 誤答は(エ)が散見された。問題文の描写が、さわと先生、どちらの視点で描かれているかについては、注意深く追ってほしい。

三 古文

(一) 活用語を抜き出すところまではよくできていたが、「んず」「らめ」のここでの活用形を選ぶところで誤答が目立った。助動詞の接続や係り結びなど、細かい点にも目を配ろう。

(二) (x)・(z)はよくできていたが、(y)で(オ)の誤答が目立った。一見当てはまりそうだが、文中に〈申し上げる〉主体が明示されていないという点に気づいてほしかった。

(三)〔採点基準〕

※ a 六代の、b 自分を源氏方に引き渡せと言い、c しばらくしたら帰るとd 母をなくさめる様子」と説明して——10点
* a・c 部各2点、b・d 部各3点。

〈嘘をついて〉といった言及にとどまり、〈しばらくしたら帰る〉と言っている。まで踏み込めていない解答が目立った。制限字数を踏まえて、ここまで具体的に説明したほうがよい、と判断して解答を作成すること。

(四)〔採点基準〕

※ a いつまでも六代を源氏方に渡さないままで b いられることではないの
で」と訳して——10点
* a・b 部各5点。

「さて」の内容が抜けている解答や、〈若君が引き渡されること〉にとどまっている解答が目立った。リード文に着目し、〈源氏方への引き渡しに
応じていない状態〉を明確にしよう。

(五) よくできていた。内容と表現を問う問題では、文中の内容だけでなく、表現の意図も押さえる必要がある。

(六) 出来がよくなかった。誤答は各選択肢に分散していたので、問題文と選択肢の内容とのつきあわせを丁寧にすることを意識しよう。

四 漢文

(一) よくできていた。

今回は送り仮名を付してヒントとしたが、大学入試では送り仮名なしで問われることも多い。間違えた人は、この機会に、送り仮名も含めた形で覚えておこう。

(二) 単純な問いに見えて、実は(六)と同じく、全体読解問題である。

「寡君」「寡人」という語自体も、一つのヒントになっている。これらの語は、漢文ではよく登場するので、用法を知らなかった人は、解説を読んで理解しておこう。

(三)〔採点基準〕

〰 a 二度とは b 戻らなかったと訳して

—— 5点

* a 部3点、b 部2点。

問われているのは、部分否定の句形だと見抜くことである。したがって、日本語としてはややこねれない表現だと感じたとしても、採点者に「部分否定だと理解している」と伝わるように訳したい。

(四)〔採点基準〕

〰 c 不 a 敢 b 愛 c 身 c 逃 死と返り点をつけて

—— 5点

* a 部1点、b 部・c 部各2点。

ごくごく基礎的な力を問うものである。正解できなかった人は、漢文の基本に立ち返る必要がある。

(五)〔採点基準〕

〰 a 主君の使者になりながら、b その贈り物を軽んじておいて、c 諸侯の土地をもらうわけにはいかないということと押さえて

—— 10点

* a 部・b 部各3点、c 部4点。

類似的表現が送り仮名つきで出ていることから、これが反語の句形であることとは見抜いてほしかった。

(六) 問題文を細部にわたって正しく読めていたかが問われている。正答できた場合でも、どのような思考プロセスで選択肢を選んだのか、そのプロセスに誤りはなかったか、振り返っておいてほしい。

第二回 高一国語

総評

高一の現時点では、古文、漢文の学習状況によって、点数の差がつきやすく、今回の模試でもその傾向が見られた。

問題別講評・採点基準

一 評論

- (一) 熟語は、一字でも誤りを含んでいたら不可。
- (e) 「精緻」の誤りが目立った。

(二) (ハ)とする誤答が多かった。述べられていることと自体は間違っていないが、ここは「反証可能性」が話題となっている箇所である。

三 小説

「a 並立しない二つの仮説を検証する科学は、b 意見の相違が調整される日常の場とは異なり、c 両者の中間の仮説を認めない」と説明して —— 10点
* a 4点、b 4点、c 2点。

b c の要素は押さえているが、a を欠く答案が目立った。傍線部のように言える前提として、科学自体に内在する要素を説明する必要がある。

(四) (ハ)とする誤答が多かった。この選択肢はラカトシユ・イムレの批判を踏まえたものだが、傍線部

はさらにその先、クーンのパラダイム論を受けたものである。

五 小説

「a 仮説を論理的で再現可能な実験によって証明することと反証可能性を存立条件としつつ、b その時代のパラダイムを身につけた c 研究者が、自らの目的を達成するためのプロセスとして行っている」と説明して —— 14点
* a 8点、b 2点、c 4点。

傍線部の前の段落にある「結果としての科学ではなく、結果を得るためのプロセスとしての科学」という記述に依拠し、そこに肉付けして解答欄を埋めた答案が多かった。確かに落としてはならないポイントではあるのだが、そこだけに終始してしまうと、「現代における『科学』の定義と問題文全体の論旨も踏まえて」という設問の指示に当たっていないことになってしまう。筆者は「このような考え方は、従来、科学史、科学哲学で議論の対象となっていた『科学』の定義とは大いに異なるものでしょう」と述べてはいるが、しかし実際に研究を行う際は、筆者自身も現代科学のパラダイム内でそのルールに従っていることに注意したい。

(六) 誤答としては(ハ)が目立った。

二 小説

(一) 「a 自分も出ることを許されなかった重い奥伝に新

関が父と一緒にいると聞き、b 新関が自分よりも父に近い立場にいると感じた」と説明して —— 12点
* a 7点、b 5点。

a の要素のみを書いたものが多かった。傍線部直前の「父と自分の距離、そして新関と父の距離を感じた」という記述から、父と新関、父と自分の距離について邦枝がどう感じたのかも説明に含めたい。

(二) これは非常によくできていた。

(三) (ハ)とする誤答が目立った。

四 小説

「a 微妙な音程のずれを感じ取れるのは娘だけだ」と思い至り、b 琴柱を直したのは邦枝に違いないと c 気づいた」と説明して —— 10点
* a 5点、b 4点、c 1点。

設問文が「寿久が『はっと息を呑んだ』のはなぜか」となっていることに注意したい。これはすなわち、解答として、寿久の頭の中にあることの説明を求めている、ということである。にもかかわらず、邦枝の頭の中にあることまで盛り込もうとすると、結果として字数が足りなくなり、必要な要素を落としてしまう。設問が求めていることのみをまとめられていたか、振り返っておこう。

(五) これはよくできていた。

(六) (ハ)を選ぶ誤答が多かった。もっともらしい選

択肢に惑わされないようにしよう。

三 古文

(一) まずは動詞を正しく抜き出せないと、活用の種類も活用形も正しく答えられない。間違えた人は、この、動詞を正しく抜き出すという段階でつまづいていたようである。

(二) いずれも基本かつ重要古語である。動詞なのに名詞の形で答えたり、逆に名詞なのに動詞の形で答えたりといった、細かなミスが目立った。そんなところで減点されるのはもったいない。注意しよう。

(三) 「採点基準」

「 a 隠瑜と死別した娘の悲しみが、 b 郭奕との結婚により c 少しでもいやされることを望む」と説明して — 10点

* a 4点、 b 3点、 c 3点。

妻を亡くした郭奕をかわいそうに思って、という方向で解釈しているものがあつた。郭奕への同情もまったくないことはないだろうが、ここはやはり、娘にとってよかれと思つてやったこと、と解釈するのが妥当である。

(四) 間違えた人は、抜き出した部分を現代語訳してみ、解答として妥当かどうか確認しておいてほしい。たとえば、最後の四字を「ことわりなければ」の「なければ」ではなく「ことわり」としてしまつと、傍線部の説明にはならなくなつてしまふ。

(五) (i) 「採点基準」

「 a 親の言いつけどおり b 郭奕と結婚し c たとしても」と説明して — 6点

* a 2点、 b 3点、 c 1点。

c の「ぬとも」にまで配慮して説明してほしい。

(ii) 「採点基準」

「 a 古き契りを b (私は) c いかで忘れん」を

「 a 前の夫との夫婦の契りを b 私は c どうして忘れるだろうか、いや、忘れないだろう」と訳して — 8点

* a 4点、 b 1点、 c 3点。

「いかで忘れん」は反語だが、ここを「どうにかして忘れよう」と解釈する誤答が散見された。

(六) これは比較的よくできていた。

(四) 漢文

(一) いずれも基本的なものである。間違えた人は、この機会に覚えておくように。

(二) ここで間違えた人は、本文全体の大きな流れをとらえられていなかったことになる。人物関係を押さえることは、読解の基本中の基本である。

(三) (i) 「採点基準」

「 a 遊びて b 時を量らずして c 君の得る所と為る(と) 」と書き下して — 4点

* a 1点、 b 1点、 c 2点。

(ii) 「採点基準」

「 a 遊んでいて時の経つのを忘れたので b あなたに捕らえられてしまった」と訳して — 4点

* a 2点、 b 2点。

書き下し・口語訳とも正しくできた人は少ない。

(四)・(五)・(七) これらも、やや残念な結果であつた。

(六) (i) 「採点基準」

「 a 禍 b 將に c 汝に d 及ばんとす(と) 」と書き下して — 4点

* a 1点、 b 1点、 c 1点、 d 1点。

(ii) 「採点基準」

「 a 桑樹が b 薪にされること」と説明して — 6点

* a 2点、 b 4点。

白答が相当数あつたのは残念である。

第三回 高一国語

総評

評論、小説、古文、漢文について、苦手な分野を作らず、バランスよく国語の力を伸ばしていきたい。高一の現時点では、古文・漢文の学習状況によって、点数の差がつきやすく、今回の模試でもその傾向が見られた。古典で思うように得点できなかった人は、まず、単語の意味や文法事項、句形の知識などの基礎をしっかりと身につけよう。基礎固めがこの先の伸びにつながるので、今回間違えたところはきちんと復習しておくことが大切だ。

問題別講評・採点基準

一 評論

(一) 熟語は、一字でも誤りを含んでいたら不可。
(e) 「完璧」の「壁」を「壁」とする誤りが非常に多かった。

(二) これは易しかったようだ。よく出来ている。

(三) 「採点基準」

「a 商品の選択の基準に対するこだわりがなく、ある程度の商品でも満足できる」と説明して

* a 6点、b 4点。 — 10点
b 部で、「購入した商品に満足できる」とことごとく

まり、その商品が「ある程度のものであってもよいことまで説明できていない答案が多かった。『最高の商品』を求めるマキシマイザーに対比されているのだから、この点は明確にしたい。

(四) (エ)という誤答が多かった。ここで述べられているのは専ら商品選択に関わることであり、「独自の人生観」というのは、やや言い過ぎである。

(五) 「採点基準」

「a 人々が、b 自分が購入したものよりも良い商品があったという後悔に耐えつつも、c 企業の提供する画一的な文化に満足せず、d より良い生活を求めて自由に商品を探そうとする社会」と説明して

* a 1点、b 4点、c 4点、d 5点。 — 14点
「人々がサテイスファイサーではなくマキシマイザーとして行動する社会」では説明になっていないし、字数も大幅に足りない。そこでそれぞれに説明を加えようとするのだが、「サテイスファイサー」に関する説明はここでは必要ないことに気づいてほしい。これを盛り込んでしまったために、必要な要素を落としてしまった答案が多かった。

(六) 問題文全体が対象となる内容合致問題で、選択肢が三行と長く、問題文の該当箇所と比較して丁寧に検討する必要がある。誤答としては(A)が目立った。解説をよく読んで復習しておこう。

二 小説

(一) 「採点基準」

「a 着物に着がえた心地よさから、思わず普段と同じようにふるまってしまったことで、自分がb 母の死に悲しみを感じていないことを c 兄達に気づかれたのではないかと恐れたから」と説明して

* a 5点、b 3点、c 4点。 — 12点
大枠は捉えられているものが多かった。中には、傍線部直後の一文「……不覚にも習癖を動作させたのだ。」までの内容で答案を作っているものもあったが、さらに次の一文も押さえる必要がある。

(二) よく出来ている。

(三) 「採点基準」

「a あえて誤解を招く言い方をすることで、自分がb 母の死に衝撃を受け、食欲をなくしている」と兄に思わせること」と説明して

* a 2点、b 6点、c 2点。 — 10点
「いえ、いいんです」という言葉の意味、すなわちa 部を押さえられていないものが多かった。

(四) よく出来ている。

(五) (イ)(ウ)という誤答が目立った。「母に対する感謝の念」「母が様々なものから守ってくれていた」というのは、母を亡くしたときに湧いてきそうな思いではある。しかしそれは、一般的に、ということではある。

あつて、ここではあくまで問題文に即して考えなければならぬ。

(六) (イ)という誤答が散見された。『僕』の姿に「批判的」な感情を持った読者はいるだろうが、作者が「批判的に」描いているとは言えない。

古文

(一) まずは動詞を正しく抜き出せたかどうか、振り返っておいてほしい。

(二) (z) 「あなかしこ」が難しかったようである。

(三) ここで間違えた人は、問題文のあらすじを捉えられていなかったということになる。

採点基準

「生活に困った者などと名乗るので、b 気の毒であるから c 少しでも差し上げたいけれども」と訳して — 8 点

* a 3 点、b 2 点、c 3 点。

「名乗れば」の「ば」、「いとほしさに」の「に」を正しく訳出できていないものが多い。

採点基準

「伊佐の入道ほどの者が、b 海賊に遭い縛られて、荷物を奪われたと c 言われるのは不名誉だから」と説明して — 8 点

* a 2 点、b 3 点、c 3 点。

傍線部自体の解釈を誤つたと思われる誤答が多かつた。傍線部の意味を正しく捉えられていたか、振り返っておいてほしい。

採点基準

(六) (i) 「自分を伊佐の入道だと名乗っている点」と説明して — 5 点

「伊佐の入道になりすましている」「自分が伊佐の入道である」などでも可。

* 「実は伊佐の入道ではない」「実際はただの講師である」など、事実のみを説明したものは-3 点。

採点基準

(ii) 「兵士が多くいるように振る舞っている点」と説明して — 5 点

* 「船に大勢いるように話している」など、〈兵士〉という点が明確でないものは-1 点。

* 「船には兵がいること」など、〈見せかけている〉意を欠くものは-2 点。

(i) で「多くの戦を生き抜いた」とするものがあつたが、それだけでは海賊は逃げ出さないうらう。

(七) 誤答は割れている。正しく読めた人が少なかつたことの表れだろう。

漢文

(一) いずれも基本的なものである。間違えた人はこの機会に覚えておこう。

(二) (v) の出来がよくなかつた。

採点基準

(三) (i) a 奈何ぞ b 廷に(一) c 廷尉を辱むる(や) (と) と書き下して — 4 点

* a 1 点、b 1 点、c 2 点。

採点基準

(ii) a どうして b 宮廷の中で c 廷尉に恥をかかせた a のか(と) と訳して — 4 点

* a 2 点、b 1 点、c 1 点。出来ていない。せめて「奈何ぞ」ぐらいは正しく押さえないところである。

採点基準

(四) a 自分の年齢と身分を考えると、b 生きていくうちに c 張廷尉のためになることはできそうもないということ」と説明して — 6 点

* a 2 点、b 1 点、c 3 点。これも出来ていない。

(五) (i) 「積之……結之」という誤答が多い。積之は、王生の臣であるわけではない。

採点基準

(ii) a 裁判の議決にあたるときは、b いつも c 公平な判決を下した」と訳して — 6 点

* a 2 点、b 1 点、c 3 点。

(六) 選択肢に対語が並んでいたからか、AB に入る語も対語でなければならぬと思つてしまった人が多かつたようである。

第四回 高一国語

総評

評論、小説、古文、漢文について、苦手な分野を作らず、バランスよく国語の力を伸ばしていきたい。高一の現時点では、古文・漢文の学習状況によって、点数の差がつきやすく、今回の模試でもその傾向が見られた。古典で思うように得点できなかった人は、まず、単語の意味や文法事項、句形の知識などの基礎をしっかりと身につけよう。基礎固めがこの先の伸びにつながるので、今回間違えたところはきちんと復習しておくことが大切だ。

問題別講評・採点基準

一 評論

(一) 熟語は、一字でも誤りを含んでいたら不可。(b)「犠牲」の「牲」を誤るものが目立った。

(二) 「採点基準」

「a 唐突に悲惨な死を遂げた人が b 死者として存在するかのように考えること、c その人との関係の喪失に耐える(行為)」と説明して

* a 3点、b 3点、c 4点。

傍線部直後の具体例から、ここでの「亡くなった人」が自然な亡くなり方をしたわけではないことを押さえない。だからこそ、遺族はよりこのような行

為へと導かれるのである。「死者として存在するかのように考える」にとどまる答案も多かったが、そのような行為の意味にまで踏み込む必要がある。

(三) これはよく出来ていた。

(四) (ウ)では「湯灌に代わるもの」の意が表せない。また(オ)の「旧弊」には悪いものというニュアンスがあるが、筆者が「湯灌」を悪いものとしてとらえているとは読み取れない。

(五) 「採点基準」

「a 死体は b 死んだ状態の単なる物体という意味だが、c 遺体は d 生前の人格が想定されており、e その人が特別の関係にあった人びとに対し、処理を期待して残した身体という意味である。」と説明して

* a 1点、b 5点、c 1点、d 4点、e 5点。

全般的な外れという答案は少なかった。いかに重複しないように要素をピックアップして答案にまとめあげるか、というところで差がついたようだ。

(六) 問題文のテーマが日本人の「死の文化」なので、実質的に問題文全体を対象とする内容合致問題である。選択肢が三行と長く、問題文の該当箇所と比較して丁寧に検討する必要がある。誤答としては(オ)が目立った。解説をよく読んで復習しておく。

二 小説

(一) (イ)という誤答が目立った。方向として間違っているわけではないが、相対的に正答よりは劣る、という選択肢である。こういった、明らかな誤りはない複数の選択肢の中から最適なものを選ぶ、という場合もあるので注意しよう。

(二) 誤答では(ウ)が目立つ。

(三) これはよく出来ていた。

(四) 「採点基準」

「a 長く生きられなくても、b 生きた証として誰かの心の中にそっと存在を残すことができれば満足だ」ということ。」と説明して

* a 4点、b 8点。

生きた証を残したい、というところは、多くの人が押さえられていた。

(五) 「採点基準」

「a 両親の子として生まれた奇跡に感謝しており、b 両親を大切に思っているということ、c 健一に伝えたかったから。」と説明して

* a 6点、b 4点、c 2点。

解答の大枠は「何かを健一に伝えたかったから」となるが、その伝えたかった「何か」だけに答案内容を絞ってしまい、それを健一に伝えたかったとまでは言っていないものが多かった。

(六) (エ)という誤答が散見されたが、「絶望」の前提

となるべき「生きたい」という意欲が英樹の言動には見られないことに注意しよう。

三 古文

(一) まずは動詞を正しく抜き出せたかどうか、振り返っておいてほしい。

(二) (y) 「げに」の誤りが目立った。語義を知らず文脈だけから選んだ結果が(エ)「先だって」だろう。

(三) [採点基準]

「私が以前に窮楽に頼んでいた書を b あなたが持つて来なさるならば、c あなたが窮楽の子どもである証拠としよう」と訳して

* a 3点、b 2点、c 3点。

「これ」とは何か、「携へ」るのは誰か、何の「証」となるのかを説明したうえで口語訳する。説明に意識が行ってしまったせい、「給ふ」や「べし」の訳がおろそかになってしまったのが目立つ。

(四) 傍線部の「心を隔て」という表現に引きずられてしまったせい、(ウ)という誤答が目立った。

(五) [採点基準]

「a 下血で汚れた b 父の寢床を c きれいにするのを d 汚らしい(と思うこと)」と説明して

* a 2点、b 2点、c 1点、d 1点。 — 6点

「汝もまた同じとはいへど」まで反映させようと

すると、字数が足りなくなる。ポイントを絞り込んで解答を作成しよう。

(六) A [採点基準]

「a 父への b 世話や病気の看病の様子」と説明して

* a 1点、b 4点。

B [採点基準]

「a 久兵衛の父への b 親孝行ぶり全体」と説明して

* a 2点、b 3点。

「これら」に第一段落の内容も含まれると解釈してしまったものが多かった。

(七) 誤答は割れている。正しく読めた人が少なかったことの表れだろう。

(四) 漢文

(一) 思ったより出来が悪かった。いずれもよく問われるものである。間違えた人は、この機会に覚えておこう。

(二) [採点基準]

「a 公乗不仁をして b 賜政たら(を為さ) c しむ」と書き下して

* a 2点、b 3点、c 1点。 — 6点

「為」は動詞・助動詞いずれの読みも可とした。

(三) [採点基準]

「a 文侯は b 飲んだけれども c 盃一杯全部は d 飲み干さなかった」と訳して

* a 1点、b 2点、c 2点、d 1点 — 6点

「文侯は飲んで飲み干さなかった」という答案があった。「尽」以外のわかるところを訳そう、ということだろうが、「飲んで飲み干さなかった」は日本語としてつながりが悪いことに気づきたい。

(四) (i) (イ)という誤答が目立った。逆に言えばどうなるか、ということ、傍線部に続く部分もあわせて考える。

(ii) [採点基準]

「a 自分でルールを決め、b 家臣たちが問題なく受けている罰杯は c 文侯も受けるべきだ」と説明して

* a 2点、b 5点、c 3点。 — 10点

これは難しかったようで、方向違いの答案が多々見られた。

(五) 誤答では(ウ)が目立ったが、君主が臣下に対して「承」ることはない。

総評

評論、小説、古文、漢文について、苦手な分野を作らず、バランスよく国語の力を伸ばしていきたい。高一の現時点では、古文・漢文の学習状況によって、点数の差がつきやすく、今回の模試でもその傾向が見られた。古典で思うように得点できなかった人は、まず、単語の意味や文法事項、句形の知識などの基礎をしっかりと身につけよう。基礎固めがこの先の伸びにつながるので、今回間違えたところはきちんと復習しておくことが大切だ。

問題別講評・採点基準

一 評論

(一) 熟語は、一字でも誤りを含んでいたら不可。(b)「援用」の「援」、(d)「還元」の「還」、(e)「疾患」の「疾」に誤りが目立った。

(二) 「採点基準」

※ a 童謡・唱歌の歌詞の舞台を状況証拠から具象化する試みは、b ほぼ推論でしかないから。"と説明して

* a 7点、b 3点。

まずは、傍線部の「その説明」の指示内容を(童謡(唱歌)の舞台を状況証拠から具象化する試み)とおさえ、具象化するものを(童謡(唱歌)の舞台

(風景や人・場所)などとわかりやすく説明できていたかどうか。次に「その説明」が「脆弱」となる理由を述べればよいが、「童謡や唱歌は抽象的だから」という趣旨の説明は、それにはあたらない。

(三) 誤答では(i)が目立っていた。選択肢前半が問題文の論旨とは異なることを確認しておこう。

(四) 誤答は分散していた。選択肢それぞれの意味が理解できていたか、振り返っておこう。

(五) 「採点基準」

※ a 「心のふるさと」とは、b 無意識のうちに自分は日本人であると自明視することで童謡・唱歌に覚える郷愁ではあるが、c その感覚は個人の体験に準拠しない集合的なものであり、虚構にすぎないから。"と説明して

* a 1点、b 7点、c 8点。

「心のふるさと」とは(童謡・唱歌から感じ取るノスタルジア)で(無意識に日本人と自明視すること)で(感じ取っているもの。それが(個人的な体験ではなく集合的なもの)で(虚構であること)をとらえて説明する。前者あるいは後者の説明に偏ってしまっているものが目立った。

(六) 問題文全体を対象とする内容合致問題である。選択肢が三行と長く、問題文の該当箇所と比較して丁寧に検討する必要があった。

二 小説

(一) 全体的によくできていた。間違えてしまった場合は、語句の意味をイメージや先入観で曖昧に覚えていないか、確認してほしい。

(二) 概ねよくできていた。

(三) 「採点基準」

※ a ありのままの自分ではなく舞妓の姿になることよって左京くんと仲良くなるうとした「私」は、b 卑怯なのではないかということ。"と説明して

* a 9点、b 3点。

「魔法」「シンデレラ」「王子様」の比喩がそれぞれ何を意味するのか、答案内で明示できているかどうかで差がついた。

(四) 誤答では(i)が目立っていた。存在感が薄いことに悩んでいた「私」にとって、「ずっと覚えて」という金子さんの言葉が、どれほど大きな意味を持つのか、読み取りたい。

(五) 「採点基準」

※ a 外見を取り繕うことばかりに囚われるのではなく、b 元々内在している自分の本質を大切にしようとして、c 少しずつありのままの姿を肯定していこうと考えている。"と説明して

* a 4点、b 5点、c 3点。

傍線部の直前に注目し、(自分の本質を大切に

つつ、ありのままの姿を肯定していきたい」という要素はよく押さえられていた。「京都人の精神」の部分にも注目して、〈外見を取り繕うことばかりに囚われない〉点まで説明できるとなおよかった。

(六) 誤答は(㊦)が目立った。本文後半に描かれている、京都の景観についての印象の変化と、「私」自身に対する思いの変化を重ね合わせている部分に注目してほしい。

古文

(一) 活用に関する知識不足が目立つ。活用形も、助動詞の接続を理解していればすぐに答えが出たものもある。基礎知識の習得は怠らないように。

(二) (v)「ゆゆしき」の誤りが目立つ。語義だけで(㊦)「不吉な」を選んだ答案が散見された。まずは語義で選択肢を絞るのも大切だが、必ず文脈と照らし合わせて吟味すること。

(三) よくできていた。物語では、人物関係を正しく把握することが読解の鍵となることもあるので、意識してほしい。

(四) ①よくできていた。

②「いくたり」の解釈で迷っただろう。池殿の発言の趣旨も踏まえ〈何倍も〉というニュアンスを導き出せるとよい。

(五) 「採点基準」

「a 頼朝を助けてやれという言葉は、b 大切に思っている池殿の願いなので断りづらいが、c 源氏の嫡子で優秀な頼朝の命を助けることはできないと思っただから。」と説明して
—— 10点

* a 2点、b 4点、c 4点。

〈大切に思っている池殿の願いなので断りづらい〉という要素を欠いた答案が多い。はっきりとした返事ができない清盛の気持ちを、「池殿のましますをば……」からの文脈を踏まえ、説明したい。

(六) 誤答は様々であった。どの選択肢も本文の内容をベースに立てられているので、本文に似たような表現があるからといって安易に選んでしまわないように。

(七) 「採点基準」

「a せめて命だけでも、b 助かったならば、c どうして本来の思いを遂げないであろうか、いや、遂げよう」と訳して
—— 8点

* a 2点、b 2点、c 4点。

まずは逐語的に訳すことができているか、確認してほしい。助動詞や接続助詞、副詞の基本的な訳し方は必ず押さえ、細かい失点をしない現代語訳を心がけたい。

漢文

(一) 思ったより出来が悪かった。

(二) 「採点基準」

「a 齊王淳于髡をして、b 趙に之き(て)、c 救兵を請は、d しむ」と書き下して
—— 6点

* a 2点、b 1点、c 2点、d 1点。

典型的な使役の構文なのだが、出来ていない。

(三) あまり出来ていない。まずは「何敢」の意味に忠実に考えてほしい。

(四) 「禳田者」という誤答が非常に多い。傍線部中の「其」||「禳田者」である。

(五) 「採点基準」

「a 齊王が、b あまりに少ない献上品で、c 楚に對抗できる規模の援軍を、d 趙に請おうとしているから。」と説明して
—— 10点

* a 2点、b 3点、c 3点、d 2点

問題文の趣旨そのものを取り違えていると思われるものが多かったのは残念である。

(六) 「採点基準」

「a 趙が淳于髡に、b 大量の援軍を与えたこと。」と説明して
—— 6点

* a 3点、b 3点。

〈誰が・誰に・何を〉を正確におさえない。